

16 世紀中央アジア文化史の史料としての ホーンデミールの作品

D. Iu. ユスーポワ
(磯貝健一 訳)

周知のように、ティムール当人の治世も含め、ティムール朝期にはサマルカンドを首都としたマーワラーアンナフルと、ヘラートを首都としたホラーサーンの双方において、学術、文芸、造型芸術（ミニアチュールと絵画）、音楽芸術、書道が多岐にわたる発展を遂げた。

著名なヘラートの歴史家であるホーンデミール Khwāndamīr (878/1473-74 ~ 941/1534-35) は当時の歴史学に大きく貢献した人物である。

彼は六十三年間の生涯において豊かな創作遺産を遺すことに成功した。彼が著わした作品は十三点にのぼるが、このうち現在まで伝えられているものは次の八点である—*Ma'āthir al-Mulūk* (『君主達の英雄的行為』), *Khulāṣat al-Akhhbār fī bayān Aḥwāl al-Akhyār* (『高潔なる人々の生涯の叙述に捧げられたる報知の精髓』), *Makārim al-Akhlāq* (『高貴なる人格の書』), *Dastūr al-Wuzarā'* (『ワジール達の手引き』), *Nāma-yi Nāmī* (『高名なる書』), *Rawḍat al-Ṣafā'* (『清浄の園』) 第七卷, *Habīb al-Siyar fī Akhhbār Afrād al-Bashar* (『諸個人の報知における伝記の友』), *Humāyūn-nāma* (『フマーユーンの書』)。

他の著者達の手になる歴史作品と同様、上に列挙したホーンデミールの作品も 15 世紀から 16 世紀にかけての中央アジアの政治、経済、文化についてそのもっとも重要な諸々の側面を伝えている。ただし、これらのうちでも、この時代の文化活動についての記述は特別な位置を占めていることを指摘せねばならない。

ホーンデミールの著作より明らかなようにティムール本人をはじめ、曾孫達にまでいたる彼の子孫は、マーワラーアンナフルやホラーサーン出身の学者達はもとより、遠く隔たった諸国より連れて来られた学者達にもひとしく創造的な学術活動のための良好な環境を提供していた。それと同時に、彼らはマドラサやハーナカーフにおいて教鞭をとり、図書館や病院等の機関で活動を行っていた。学者達には高額の俸給が支払われ、彼らは当時あっては恵まれた環境に暮らし、互いに交際し、ペルシア語、アラビア語、トルコ語で自らの作品を著わした。

ティムールをはじめとするティムール朝の王族、およびマーワラーアンナフルとホラーサーンのあらゆる知的エリート達は、歴史、文学、自然科学の分野における様々な作品に特別な関心を示していた。

ホーンデミールは自らの著作のなかに、フサイン・バーイカラーとその長子であるバディーウッザマーン、アリーシール・ナヴァーイー、ザヒールッディーン・バーブルとその子フマーユーンといった面々と同時代に生きた人々の記録を収めているが、その内訳は詩人達をはじめとして、数学者、天文学者、書道家、音楽家、医者といった学者達から、政治家であるワジールにまで及んでいる。また、彼の作品中にはもっとも重要な職掌のうちの若干 (parwānachi, iḥtisāb (muḥtasib), kalāntar, mubashshir, ḥāfiẓ) について、その起源とこれに任せられた者の義務に関する記録も見うけられる。

個々の人物につき述べるなかで、ホーンデミールは彼らの正確な生没年であるとか、その手になる著作について言及することがある。たとえば、ヘラートの大規模な病院のうちの一つであったダールッシファー Dār al-Shifā' では、病人の治療だけでなく医学教育も行われていた。ホーンデミールは数名の著名な医師の名を挙げている。彼らはヘラートやその周辺であるとか、インドのバーブルやフマーユーンの宮廷で生活していた。当時の優秀な医師達の多くは、これら医療施設で病人の治療にあたるのと同時に、教育機関での教育活動にも従事していたのである。彼らのなかには、自ら優れた詩を創作したり、あるいは他の詩人の作品の模倣に取り組んだりする一方で、先人の医学書に注釈を施すというような者もあった。彼らの多くはペルシア語と同程度にアラビア語にも通曉していた。さて、スルターン・フサイン・バーイカラーの侍医はつぎのような医学者達であった—マウラーナー・ムハンマド・ムイーン Mawlānā Muḥammad Mu'īn, マウラーナー・クトゥブッディーン・ムハンマド・アーダム Mawlānā Quṭb al-Dīn Muḥammad Ādam, マウラーナー・ギヤースッディーン・ムハンマド・イブン・マウラーナー・ジャラルッディーン・タビーブ Mawlānā Ghiyāth al-Dīn Muḥammad b. Mawlānā Jalāl al-Dīn Ṭabīb, マウラーナー・ダルヴィーシュ・アリー・タビーブ Mawlānā Darwish 'Alī Ṭabīb, マウラーナー・ムハンマド・タビーブ Mawlānā Muḥammad Ṭabīb, マウラーナー・アブドゥ・ル・ハイイ・トゥーニー Mawlānā 'Abd al-Ḥayy Tūnī, マウラーナー・カマルッディーン・マスウード・シルヴァーニー Mawlānā Kamāl al-Dīn Mas'ūd Shirwānī, マウラーナー・マシーフッディーン・ハビーブッラー Mawlānā Masīḥ al-Dīn Ḥabīballāh 等。彼らのうちの殆どはアリーシール・ナヴァーイーの庇護を受け、病人の治療にあたりながら、ダールッシファーで教育活動にも従事していた [Khulāṣat: 479 b–491 a; Ḥabīb: 343–4]。

マウラーナー・ギヤースッディーン・ムハンマド・イブン・ジャラルッディーン・タビーブは学術の多くの分野に精通していた。彼は医学書である *Mu'ālaġāt al-Īlāqī*¹⁾ へのコンパクトで平易な注釈書を著わしており、とりわけ医学の分野でその実力を発揮した。また、*Ḥāshiya-yi Sharḥ-i Mūjiz* (『マウラーナー・ナフィースィーの *Sharḥ-i Mūjiz* への語句注釈』) も彼の作品である [Khulāṣat: 479 b, 490 b; Makārim/Cambridge: 133 a, 134 a]。『マウラーナー・ナフィースィーの *Sharḥ-i Mūjiz*』とは、ブルハーヌッディーン・ナフィース・イブン・イヴァド・ケルマーニー Burhān al-Dīn Nafīs b. 'Iwāḍ al-Kirmānī の

手になる書物である。この医師はケルマーンで暮らしていたが、ウルグ・ベクの招請によりサマルカンドへと移住し、そこでウルグ・ベクの侍医となった。ちなみに *Sharḥ al-Mūjiz* は、著名な医者であるアリー・イブン・アッナフィース・カルシー 'Alī b. al-Nafīs al-Qarshī (d. 1288) の著書への注釈書である²⁾。マウラーナー・ギヤースッディーンは長期にわたりマドラサの聴講者達に医学書の解釈につき講義していたが、一方ではダールシフナーで病人の治療にもあたっていた。また、彼には詩の著作もある [Khulāṣat: 479 b, 490 b; Makārim/Cambridge: 133 a, 134 a]。アリーシール・ナヴァーイーは、マウラーナー・ギヤースッディーンはすぐれた詩人であり、シャイフ・ニザーミーの *Makhzan al-Asrār* を模倣した作品 (tatabbu') を著わした、と記している [Majālis: 160]。

ホーンデミールが伝えるところによれば、様々な疾病に際して特別な治療法を用いたマウラーナー・ダルヴィーシュ・アリー・タビーブの治療術をアリーシール・ナヴァーイーは高く評価していたという。彼はマフデ・ウルヤー・ミルカト・アーガー Mahd-i 'Ulyā Milkat Āghā (ウマル・シャイフの妻、のちシャルフの妻) のダールシフナーで教授 (mudarris) 職に就いており、さらに病人の治療にもあたっていた。彼には *Tadhkirat al-Nufūs* (『伝記』) や、アリーシール・ナヴァーイーの死に際して著わされた詩などの文学作品もある [Khulāṣat: 491 a; Makārim/Cambridge: 134 a, 184 b]³⁾。

マウラーナー・カマルッディーン・マスウード・シルヴァーニーはゴウハル・シャード・アーガー Gawhar Shād Āghā (シャルフの妻) のマドラサとイフラスィーヤ・マドラサで数年にわたって教壇に立っていた。彼は文体論、論理学、医学の方面で優れた才能を有していた。後に、彼はギヤースィーヤ・マドラサで講義を行うようになる。彼は当時広く行われていた瀉血の手法にも通暁していた。彼には *Hāshiyā-yi Sharḥ-i Hikmat al-'Ayn*⁴⁾ や様々な *Risāla* (『論文』) といった著作があり、いずれも学生達のあいだで広く用いられていた [Ḥabīb: 343]。

マウラーナー・ニザームッディーン・アブドゥ・ル・ハイイ・タビーブは、はじめナヴァーイーのダールシフナーで病人の治療にあっていた。彼の名声は広く響き渡っていたが、それはホージャ・ウバイドゥッラー・アフラルが病を得た際に彼がわざわざサマルカンドへと招喚されたほどで、このとき彼は後者を全快させることに成功している。ヘラートへと帰還すると、彼はスルターン・フサインの宮廷に仕えることになった。彼は脈管疾患の治療方法に通じ、その生涯最後の日々に至るまでアリーシール・ナヴァーイーの治療にあたった [Khulāṣat: 494 b; Makārim/Cambridge: 152 a; Ḥabīb: 342]。

はじめバーブルの、そして後にフマーユーンの侍医となったのが、ヘラートからインドへと招かれた著名な医師、マウラーナー・ユースフィー Mawlānā Yūsufī で、彼は数々の医学書を著わしている。彼の息子であるイスマーイル Ismā'il もまた医者であり学者であった。イブン・スィーナーの師匠で、ブハラ of 学者であるアブー・マンスール・クムリー Abū Manṣūr al-Qumrī の著作、*Kitāb al-Tanwīr fī al-Iṣṭilāḥāt al-Ṭibbiya* (『医学用語の

照明の書』⁵⁾ のペルシア語への翻訳は彼の業績である [Qānūn: 30, 53]。

ティムール朝期のヘラートは、ブハラやイラクなど世界各地からやってきた多くの詩人達が集う場であった。韻文学は、バイト、ルバーイー、ガザル、カスィーダ、マスナヴィー、ターリーフ、ムアンマー等々の様々なジャンルで発展を遂げた。サイイド・カーズィミー Sayyid Kāzīmī, マウラーナー・ムハンマド・イブン・フサームッディーン Mawlānā Muḥammad b. Ḥusām al-Dīn, カーディー・マスウード・コンミー Qāḍī Mas‘ūd Qummī, マウラーナー・ハサンシャー Mawlānā Ḥasan-shāh, ミール・ハーッジュ Mir Ḥājj, マウラーナー・サイフィー Mawlānā Sayfī, マウラーナー・リヤズィー Mawlānā Riyāḍī, マウラーナー・ニザームッディーン・アスタラーバーディー Mawlānā Niẓām al-Dīn Astarābādī, ホージャ・マンズール・ビティクチー Khwāja Manṣūr Bitikchī, マウラーナー・ビナーイー Mawlānā Binā‘ī, ホージャ・ナーシルッディーン・アブー・ナスル・ミフナ Khwāja Naṣīr al-Dīn Abū Naṣr Mihna, マウラーナー・ルトフィー Mawlānā Luṭfī といった人々はその代表的な創作者達であった。

ホーンデミール自身も書簡文学の分野での模範的な代表者であった。彼の手になる *Nāma-yi Nāmī* (『高名なる書』)⁶⁾ はこのことを明瞭に示している。それゆえにこそ、ペルシア・タジク文学の巨匠であるアブドゥッラフマーン・ジャーミーの美点に高い評価を与えるなかで、ホーンデミールはとりわけ彼のインシャー学(書簡文学)への貢献を強調しているのである [Nāmī: 65 a]。

ホーンデミールは *Makārim al-Akhlāq* (『高貴なる人格の書』) という一点の書物すべてを費やして、自らの庇護者にして偉大な詩人でもあるアリーシール・ナヴァーイーの生涯と活動、そしてその高貴な人格とを叙述している⁷⁾。

当時は、数学者(アミール・ムルタード Amīr Murtāḍ, マウラーナー・ファスィーフッディーン・ムハンマド・ニザミー Mawlānā Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad al-Niẓāmī) や天文学者(サイフッディーン・アフマド・タフターザーニー Sayf al-Dīn Aḥmad al-Taftāzānī, ビルジャンディー al-Birjandī) も創作活動を行っていた。ビルジャンディーが没したのは1525年頃のことである。彼は *Sharḥ-i Zij-i Ulughbek* (『ウルグベクの天文表への注釈』) を著わしており、やはり彼の作品である *Sharḥ-i Bist Bāb dar Ma‘rifat-i Asturlāb* (『アストロラーベの知識に関する二十章への注釈』) はナスィールッディーン・トゥースィーの論文を解説したものである [Makārim/Cambridge: 133 b]⁸⁾。

ホーンデミールが伝えているように、サーヒブキラーン(ティムールを指す一訳者) やその後継者達の宮廷において教養にあふれた歴史家達が著作活動を行ったおかげで、ティムール朝という時代は歴史学のなかに十分な形で反映されている。こうした歴史家達については、シャルフの廷臣を父にもち、法学、ハディース学、韻律学(‘arūḍ), 歴史といった諸々の学識を一身に集めたアブドゥッラッザーク・サマルカンディー ‘Abd al-Razzāq al-Samarqandī (1413～1482 生没地共にヘラート) の名を挙げるだけで十分であろう。彼は

ペルシア語のほか、アラビア語にもよく通じていた。1438年から1463年にかけて、彼はシャルフやアブ・ル・カーシム・バーブル、およびその他のティムール家の王子達の宮廷に仕えた。彼の著書である *Maṭla'ī Sa'dayn wa Majma'ī Bahrayn* では、14世紀から15世紀にかけてのイランと中央アジアの社会、政治、文化が明らかにされており、さらに周辺諸国（インド、中国等）との経済、政治、文化といった面での関係についても叙述されている [Ḥabīb: 335]。

15世紀に活躍したヘラートの著名な歴史家である自らの祖父、ミールホンドの生涯と活動について記すため、ホーンデミールは自身の作品において独立した箇所を設けている [Makārim/Cambridge: 142 b; Khulāṣat/Tehran: 210–211]。

著名なハディース学者や神学者、法学者達もまたヘラートに住み、そこで創作活動に従事した。マウラーナー・シャムスッディーン・ムハンマド・タバードガーニー Mawlānā Shams al-Dīn Muḥammad Tabādġānī, マウラーナー・ニザームッディーン・アブドゥ・ル・ハック Mawlānā Niẓām al-Dīn 'Abd al-Ḥaqq, ホージャ・イマードウッディーン・アブドゥ・ル・アズィーズ Khwāja 'Imād al-Dīn 'Abd al-'Aziz, マウラーナー・ムーヌッディーン・アル・ファラーヒー Mawlānā Mu'īn al-Dīn al-Farāhī 等はそういった人々である。

当時のヘラートには卓越した芸術家達も集まっていた。たとえば、アリーシール・ナヴァーイーの私的図書館では多くの書道家達がそこに起居して創作活動を行っており、彼らは集中的にこの図書館の蔵書を増やしていったのである。彼らについて言及しながら、ホーンデミールは当時広く用いられていたナスフ、ナストゥリーク、タウリークなどの書体やキターバ（碑銘）をものしていた書道家達につき叙述を行っており、さらにはこうした書道家達の生没年や著書、および彼らが従事していた別の職業についても述べている。一例を挙げると、ホーンデミールは著名な書道家であるスルターン・アリー・マシュハディー Sulṭān 'Alī Mashhadī について述べながら、彼の容貌や内面、様々な書体における技量について触れ、マウラーナー・ジャッファル Mawlānā Ja'far やその弟子達であるマウラーナー・アズハル Mawlānā Azhar, マウラーナー・アブドゥッラー・アーシュパズ Mawlānā 'Abdallāh Āsh-paz, マウラーナー・シャイフ・マフムード Mawlānā Shaykh Maḥmūd といった彼以前の著名な書道家達を挙げ、さらにはマトラウ（開句）を中心として、彼が作った詩についても言及しつつ、彼の没年である 929/1522–3年という年代を伝えているのである [Khulāṣat: 496 a; Ḥabīb: 19]。

こうした内容は、ホージャ・ハーフィズ・ムハンマド Khwāja Ḥāfiẓ Muḥammad, マウラーナー・スルターン・アリー・カーイニー Mawlānā Sulṭān 'Alī Qāyini, マウラーナー・ザイヌッディーン・マフムード Mawlānā Zayn al-Dīn Maḥmūd, マウラーナー・スルターン・アリー・サブズ・マシュハディー Mawlānā Sulṭān 'Alī Sabz Mashhadī, マウラーナー・スルターン・ムハンマド Mawlānā Sulṭān Muḥammad, マウラーナー・

スール Mawlānā Nūr, マウラーナー・アラーウッディーン・ムハンマド Mawlānā ‘Alā’ al-Dīn Muḥammad, マウラーナー・スルターン・ムハンマド・ハンダー Mawlānā Sulṭān Muḥammad Khandā, マウラーナー・バフラーニー Mawlānā Baḥrānī, マウラーナー・アディーミー Mawlānā ‘Adimī, マウラーナー・アブドゥ・ル・ジャミール Mawlānā ‘Abd al-Jamīl, アブドゥ・ル・カーディル・グーヤンダ ‘Abd al-Qādir Gūyanda といった書道家達についてホーンデミールが述べる際にも見られるものである [Khulāṣat : 496 b-497 a; Makārim /Cambridge : 179 b; Ḥabīb : 346; Rawḍat 1716 : 227]。

また、当時は書体の美しさだけでなく、速く書くこともまた評価の対象であったことを付言しておく。

アリーシール・ナヴァーイーは画家や建築家も庇護の対象とした。たとえば、ミニアチュールと絵画の達人であったホージャ・ミーラク・ナッカーシュは、ヘラートの様々な建築物に多くの装飾画を施しており、ホーンデミールは、彼個人の独特の資質であるとか彼の生涯に起こった出来事を伝えている。彼と共に活躍したこの分野の代表的人物としては、マウラーナー・ハーჯー・ムハンマド・ナッカーシュ Mawlānā Ḥājī Muḥammad Naqqāsh, マウラーナー・ムハンマド・イスファハーニー Mawlānā Muḥammad Iṣfahānī, ウスタード・アリー・チェフレゴシャーイ Ustād ‘Alī Chihra-gushāy, そしてウスタード・ビフザード Ustād Bihzād が挙げられる [Khulāṣat : 472 a, 497 a-b; Makārim/Cambridge : 176 b-177 a; Ḥabīb : 348; Rawḍat 1277 : 230 a; Rawḍat 1716 : 242 b, 243 a]。ホーンデミールは傑出した画家という評価をビフザードに与えており、彼をシャー・イスマーイール一世の宮廷図書館長に任ずる旨の勅書の写しを引用している。ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵の *Nāma-yi Nāmī* の写本 (инв. no. 801) によれば、勅書は 928 年ジュマダー第一月 27 日 / 1522 年 4 月 24 日に発行されている [Nāmī : 188-190]。この日付はカマルッディーン・ビフザードが何時ヘラートからタブリーズへと出発したのかを確定する際に有益なものである。

当時は音楽芸術も高水準に達していた。ホーンデミールは、アリーシール・ナヴァーイー自身をこの分野を代表する人物と評価する一方で、他に類を見ないような演奏家や歌手の一団が彼の庇護下でいかに活躍したかについて強調している。これらの音楽家は、ハーフィズ・カザーク Ḥāfiẓ Qazāq, ウスタード・サイイド・アフマド Ustād Sayyid Aḥmad, ウスタード・シャー・クリー Ustād Shāh Qulī, ウスタード・フサイン Ustād Ḥusayn, ウスタード・ムハンマド Ustād Muḥammad, ウスタード・シャイフ・ナーイー Ustād Shaykh Nāyī, マウラーナー・アリーシャー Mawlānā ‘Alī-shāh, ムハンマド・ハンダーン Muḥammad Khandān といった人々である。また、よく用いられていたのは、ウード、ネイ、カーヌーン、ギジャク、コボズ等の楽器であった [Khulāṣat : 496 b, 498 a-b; Makārim/Cambridge : 175 b]。

ティムール朝期のヘラートおよびその周辺では、マスジド、マドラサ、ハーナカーフ、庭

園、宮殿、公園、橋梁、浴場、病院、リバート、キャラヴァンサライの建造や大小運河の掘削、貯水池の建設が大きな規模で行われた。たとえば、ホーンデミールは諸々のマスジドについて述べる際に、それが何処に位置しているか、何時建設されたか、内側と外側の様子はどんなものであるか、建設の際にどのような資材が使われたかについて記し、そこに刻された碑銘の著者やハーフィズ（コーラン読誦者）の名前まで挙げているのである。もしもそのマスジドが、彼の時代になって再建されたものであるならば、ホーンデミールはマスジドの歴史について述べる。この当時、ヘラートとその周辺、およびカンダハールでは合計40にのぼるマスジドが建造された [Khulāṣat: 470 b- 477 b; Ma'āthir: 175-176; Makārim/Cambridge: 60, 65, 97, 115, 151 a; Dastūr: 102 b]。

ティムールの治世における学術と文化の高度の発展は、専門知識を有する人材を育成する高等教育機関の設立を余儀なくさせた。当時、高等教育の中心としての役割を担ったのはマドラサと、部分的にはハーナカーフであった。マーワラーアンナフルとホラーサーンの両地域には、大抵の場合君主や資産家が資金を投じて建設した、多くのマドラサが存在していた。ホーンデミールの著作で言及されるヘラート市域内に立地していたマドラサは36以上にのぼっている。これらのマドラサでは神学、法学、論理学、数学、天文学、医学、歴史、文学その他についての講義が行われていた。そのムダッリス（教授）達はそれぞれの分野でもっとも高名な学者達であり、ここで修学するために様々な土地から学生がやって来た。シャイフ・ル・イスラームのマウラーナー・シハーブッディーン・アブドゥッラー・トゥッシー Mawlānā Shihāb al-Dīn 'Abdallāh al-Ṭūsī もその一人で、クルト朝時代にヘラート市域内のマスジド・ジャーミッ付近に建造されたギヤーシーヤ・マドラサで学ぶため、この人物は1410年にトゥースからヘラートへとやって来たのである [Khulāṣat: 472 b; Mujmal: 157, 199]。数々のマドラサのうちもっとも有名であったのはヘラート市域外に立地していたアミール・フィールズ・シャーのマドラサとハーナカーフであり [Khulāṣat: 473 b]、ほかにシファーイーヤ・マドラサも名声を博していた。シファーイーヤ・マドラサでは、当時の高名な医者であるギヤースッディーン・ムハンマドが医学書の講義を行っていた [Makārim/Cambridge: 133 a; Bābur 223]。

インジール運河畔、ダールッシファー病院の対面に位置したイフラーシーヤ・マドラサとハラースイーヤ・ハーナカーフでは、スルターン・フサインの治世中11人のムダッリスが宗教およびその周辺諸科学についての講義を行っており、このマドラサで学ぶために世界各地から学生が集まってきた。このマドラサで修学した学生は、12年の間におよそ千名を数え、彼らのうちの多くはムダッリスとなっている。このマドラサで学んだ者としては、アミール・ブルハーヌッディーン・アターアッラー・ニーシャープーリー Amīr Burhān al-Dīn 'Aṭā'allāh Nishāpūrī, カーディー・イフティヤールッディーン・ハサン・トゥルバティー Qāḍī Ikhtiyār al-Dīn Ḥasan Turbatī, アミール・ムルタード Amīr Murtāḍ, マウラーナー・ファスィーフッディーン・ムハンマド・ニザーミー Mawlānā Faṣīḥ al-Dīn

Muḥammad Nizāmī といった人々が挙げられる。ここでの学習は競争原理によって行われており、毎月選抜の結果成績不良の学生達がふるいおとされ、学習を継続できたのは成績優良者のみであった [Khulāṣat: 475 a, 482 a-b, 487 b; Ma'āthir: 175; Makārim/Cambridge: 132 b, 133 a, 145 b, 158 a, 169 b, 170 a]。

ホーンデミールの著作では一定部分がヘラートやその周辺のハーナカーフの叙述に割かれているが、これらハーナカーフはダルヴィーシュ達の修行の場としての機能以上に、むしろ教育施設としての性格を色濃く有するものであった。ホーンデミールの著作中に現れるハーナカーフは総数 24 におよんでいる [Khulāṣat: 472 b-474 a, 475 a, 476 a-b, 477 a-b, 488 b, 490 a-b; Ma'āthir: 174-175; Dastūr: 102 b; Makārim/Cambridge: 131 b, 133 a, 145 b, 146 a]。

マドラサとハーナカーフの聴講者達は様々な分野にわたる多くの書物を丹念に研究した。また、そのためにアリーシール・ナヴァーイーはヘラートに豊富な蔵書を有する図書館を建設しており、この図書館はミールホンドやホーンデミール自身も含め、多くの人々に利用された。さらにヘラートでは、往時ティムールの息子シャルフのものであった図書館も復興され、この図書館のためにスルターン・バディーウッザマーンが数々の書籍をワクフとしている。

ティムールとその子孫、および彼らの近侍達はあらゆる手段を尽くして医学と医療活動に保護を与えたが、彼らはこうした分野の活動を実際上でも援助し、多くの地域で大小の病院や様々な厚生施設が建設されることとなった。ヘラートのダールッシファーやダールフッフファーズ Dār al-Ḥuffāz, バーゲ・ザーガーン Bāgh-i Zāghān のダールッシファーといった様々な病院、およびこれらの施設で働いていた多数の医師達についてのホーンデミールの記述はこの意味で注目に値する [Khulāṣat: 472 b, 473 b, 474 b, 475 a, 481 a; Ma'āthir: 175]。

知的イスラームの哲学は、高邁な精神を持ち、調和のとれた、自己犠牲的な人間をその関心の中心に据えていた。このテーマは、アリーシール・ナヴァーイーの主要な文学・哲学関連の著作においても主たる地位を占めている。だからこそ、そこでは知的発達という問題だけでなく、道徳的人格の形成であるとか精神力といったものにも重要な意義が与えられているのである。

ティムール朝の繁栄期全般にわたり広範に展開していた公共施設やレクリエーション施設の建設事業は、肉体的な健康の増進や人々の向上を目的としたものであり、浴場などの施設には巨額の資金が投じられた。ホーンデミールが伝えるところによれば、アリーシール・ナヴァーイー自身もヘラートとその周辺における公共浴場の建設を援助しており、ズィヤラトガーフ Ziyaratgāh, ダッライェ・ザンギー Darra-yi Zangī, トゥーワジー Tūwājī, チェヘルドホタラーン Chihildukhtarān, タルナーブ Tarnāb, パンジュデフ Panjdih, フェイザーバード Fayḍābād, サァダーバード Sa'dābād 等の浴場がこれにあたっている。

なお、建設された浴場は 13 以上にのぼった [Makārim/Cambridge: 147 a; Ma'āthir: 175]。

ホーンデミールが伝える多くの庭園や公園、宮殿は君主達の居処として、または休息の場として使われ、彼らが不在の際には一般の民衆がそこで憩いの時をすごした。このような場としては、バーゲ・メルガニー Bāgh-i Mirghani, タフテ・サレ・ポレ・サンゲスターン Takht-i Sar-i Pul-i Sangistān, バーグチェイエ・シャウキーヤ Bāghcha-yi Shawqīya, バーグチェイエ・タフテ・アズィーザーン Bāghcha-yi Takht-i 'Azizān, バーグチェイエ・ガーズルガーフ Bāghcha-yi Gāzurgāh, タフテ・バーバー・スーフテ Takht-i Bābā Sūkhta, バーゲ・ノウ Bāgh-i Naw, バーゲ・ズバイダ Bāgh-i Zubayda, バーゲ・ジャハーン・アーラー Bāgh-i Jahān-ārā, バーゲ・バイトゥール・アマーン Bāgh-i Bayt al-Amān などが挙げられる。これらのうちの多くはシャルフの治世中すでに開発されていたが、スルターン・フサインの時代になって復興されたものである [Khulāṣat: 477 b-478 b, 479 a; Ma'āthir: 173-174, 176; Dastūr: 101 b; Makārim/Cambridge: 147 b-148 a, 182 a]。

住民の飲用および灌漑用に供せられる水を供給するという問題にも然るべき注意が払われており、その解決のために多くの貯水池や大小の運河が建設され、ヘラートとその周辺地域のみでも 22 以上の貯水池がつけられたが、そのうちの若干は医療施設として利用された [Makārim/Cambridge: 145 b, 146 b, 174 a; Ma'āthir: 174, 177]。これらの上には橋梁が設置されたが、いうまでもなくこのことは国家の経済と政治の発展に大きな影響を与えた。また、これは橋梁という渡水施設の建設者である一般民衆の生活にも一定程度の影響を与えた。当時このような橋梁は 30 以上にのぼっていた [Makārim/Cambridge: 147 a, 151 a; Rawḍat/Bombay: 4]。

また、リバート（大道沿いの宿泊施設）やキャラヴァンサライは商業の発展と外交関係に大いに寄与したが、ホーンデミールはこうした施設の建設・復興事業につき詳細に記録している。リバートの建設は合計 60 件に及んだ [Makārim/Cambridge: 139 a, 146 a-b, 180 b, 181 a-b; Ma'āthir: 175, 177, 178; Khulāṣat: 474 b, 476 b, 477 a-b, 494 b]。

ホーンデミールが伝えるところでは、ヘラートは 10 個の街区（マハッラ）に分かれており、各々の街区はさらにいくつかの小路に分かれていた [Khulāṣat: 4 a-b; Makārim/Cambridge: 146 b, 151 a, 167 b; Ma'āthir: 178]。シャルフやパーイシングル・ミールザーの時代に建造された諸門（ダルヴーゼイエ・フィールーザーバード Darwāza-yi Firūzābād, ダルベ・イラク Darb-i 'Irāq, ダルベ・ホシュ Darb-i Khush, ダルベ・マリク Darb-i Malik）は良好な状態で保存されていた [Ma'āthir: 168, 171, 176; Khulāṣat Tehran: 193; Khulāṣat: 473 b; Dastūr: 97 b]。街の内部に目を向けると、スルターン・フサインの時代にはすでにバザールや商店などは建設が完了していたが、たとえば、バーザーレ・ホシュ Bāzār-i Khush, バーザーレ・マリク Bāzār-i Malik などがそれにあたる

[Ma'āthir: 144, 166, 168]。

ヘラートとその周辺地域では、新たな施設が建設される一方で復興事業も系統だで行われた。ヘラートの多くの老朽化した建築物を復興する際にその指揮にあたったのは、ギヤースッディーン・ムハンマド・バグバーン Ghiyāth al-Dīn Muḥammad Bāghbān の子孫であるアミール・ジャラルッディーン・マフムード Amīr Jalāl al-Dīn Maḥmūd とアミール・ニザームッディーン・スルターン Amīr Nizām al-Dīn Sulṭān であった [Ma'āthir: 176]。

また、当時は貧困層の保護にも大きな関心が向けられていたが、その証左となるのはランガル (ダルヴィーシュの寮) の存在で、そこでは常に衣服と食事の配給が行われていた [Makārim/Cambridge: 130 b, 146 a; Khulāṣat: 473 b]。

以上、我々はホーンデミールの著作に収められている、ティムール朝期の学術と文化の発展に関する諸問題のうちの幾許かの局面をごく簡単に扱ってきた。

ここで得られた知見を分析し、かつこれらの知見を当時の他の著者達の手になる史料と比較するならば、マワラーアンナフルとホラーサーンの科学と文化の発展のための堅固な土台を築いたのはティムールその人であり、その子孫達は彼が始めた事業を継続したのだ、ということが結論として導かれるのである。

※ 本稿は 1996 年 11 月 9 日第 34 回羽田記念館講演会 (京都大学文学部) における講演内容 (ロシア語) の日本語訳である。翻訳にあたって転写法を改め、注を追加した。

注

- 1) (訳者注) イブン・スィーナ (Abū 'Alī ibn Sīnā) (d. 1037) の *al-Qānūn fī al-Ṭibb* の摘要として Muḥammad b. Yūsuf al-Īlāqī (d. 1092) が著わした *Ikhtisār Kitāb al-Qānūn* を指す [Brockelmann, vol. 1 : 457]。
- 2) この興味深い情報は、優れたウズベク人東洋学者であり東洋の医学作品に詳しい、ウズベキスタン共和国科学アカデミー正会員 U. I. カリーモフ氏に御教示いただいたものである。(以下訳者注) ちなみに、ここでいう 'Alī b. al-Nafīs al-Qarshī の著書とはイブン・スィーナの *al-Qānūn fī al-Ṭibb* の摘要の一つ、*al-Mūjiz* のことである [Brockelmann, vol. 1 : 457]。
- 3) 尚、ダルヴィーシュ・アリーについては Majālis: 125, 139; Urunbaev: 75 も参照のこと。
- 4) (訳者注) 『*Hikmat al-'Ayn* への注釈に付された語句注釈』の意。ちなみに *Hikmat al-'Ayn* は Najm al-Dīn 'Alī b. 'Umar al-Qazwīnī (d. 1276 or 1294) の著書で、形而上学と物理学を扱ったものである [Brockelmann, vol. 1 : 466-7; supp. 1 : 847-8]。
- 5) (訳者注) al-Qumrī の没年は確定しておらず、990 年以降とされる。この作品の名は Brockelmann には見出されないが、そこで挙げられている同じ著者の作品、*Muṣṭalahāt al-Ṭibb* と恐らくは同一のものであろう [Brockelmann, supp. 1 : 424-5]。

- 6) 本作品の写本は九点が確認できる。そのうちの七点については SVR, vol. 1, no. 362-6 ; vol. 5, no. 3770-1 を見よ。大英博物館図書館所蔵の一点については T. Gandjei が自著の序文において言及している [Makārim/Cambridge :xiv]。インドに存在するもう一点の写本について, Hidayat Hosain はそれが現存する本作品の唯一の写本であると述べている [Qānūn : xxix]。
- 7) 現存する本作品の写本は三点で, そのうち一点は大英博物館図書館に所蔵されている [Rieu : 360-367]。ウズベキスタン共和国科学アカデミー-東洋学研究所所蔵の二点の写本 (инв. no. 5278, 5340) はこの写本から書写されたものである。本作品は過去に二度, ケンブリッジとカブルで出版されている [Makārim/Cambridge ; Makārim/Kabul]。
- 8) (訳者注) ビルジャンディーのフル・ネームは 'Abd al-'Alīy b. Muḥammad b. Ḥusayn al-Birjandī, 『ウルグベクの天文表』の正式名称は *Zij-i Jadīd-i Sulṭānī* である [Brockelmann, vol. 2, 212-3]。また, 本文中の『アストロラーベの知識に関する二十章』とは, Abū Ja'far Naṣīr al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Ṭūsī (d. 1274), *Bist Bāb* のことである [Brockelmann, supp. 1 : 932]。

参考文献

- Bābur : Zāhīr al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur-nāma*, tr. M. Sal'e, Tashkent, 1958.
 Brockelmann : Carl Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 5 vols., reprint, Leiden, 1937-1949.
 Dastūr : Khwāndamīr, *Dastūr al-Wuzarā'*, MS. ИВ АН РУз, инв. № 55/1.
 Ḥabīb : Khwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*, ed. Jalāl al-Dīn Humā'ī, vol. 4, Tehran, 1333.
 Qānūn : Khwāndamīr, *Qānūn-i Humāyūnī*, ed. M. Hidayat Hosain, Calcutta, 1940.
 Khulāṣat : Khwāndamīr, *Khulāṣat al-Akhbār*, MS. ИВ АН РУз, инв. № 2209.
 Khulāṣat/Tehran : Khwāndamīr, *Khulāṣat al-Akhbār* appended to Ma'āthīr.
 Ma'āthīr : Khwāndamīr, *Ma'āthīr al-Mulūk*, ed. Mīr Hāshim Muḥaddīth, Tehran, 1372/1993-4.
 Majālis : Mīr 'Alī Shīr, *Majālis al-Nafā'is*, ed. Suyima G'anieva, Tashkent, 1961.
 Makārim/Cambridge : Khwāndamīr, *Makārim al-Akhlāq*, ed. T. Gandjei, Cambridge, 1979.
 Makārim/Kabul : Khwāndamīr, *Makārim al-Akhlāq*, ed. 'Abd al-Ghaffār Bayānī, Kabul, 1981.
 Mujmal : Faṣīḥ al-Khwāfī, *Mujmal-i Faṣīḥī*, tr. D. Iu. Iusupova, Tashkent, 1980.
 Nāmī : Khwāndamīr, *Nāma-yi Nāmī*, MS. ИВ АН РУз, инв. № 801.
 Rawḍat 1277 : Mīrkhwānd, *Rawḍat al-Ṣafā'*, MS. ИВ АН РУз, инв. № 1277.
 Rawḍat 1716 : Mīrkhwānd, *Rawḍat al-Ṣafā'*, MS. ИВ АН РУз, инв. № 1716.
 Rawḍat/Bombay : Mīrkhwānd, *Rawḍat al-Ṣafā'*, vol. 7, Bombay, 1281/1864-5.
 Rieu : G. Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, vol. 1, London, 1879.
 SVR : Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР, Ташкент, 1952-.
 Urunbaev : A. У. Урунбаев, Письма-автографы Абдуррахмана Джами из „Альбома Навои“, Ташкент, 1982.

(著者：ウズベキスタン共和国科学アカデミー-東洋学研究所)

(訳者：日本学術振興会・京都大学大学院文学研究科)